

8月 HUG だより

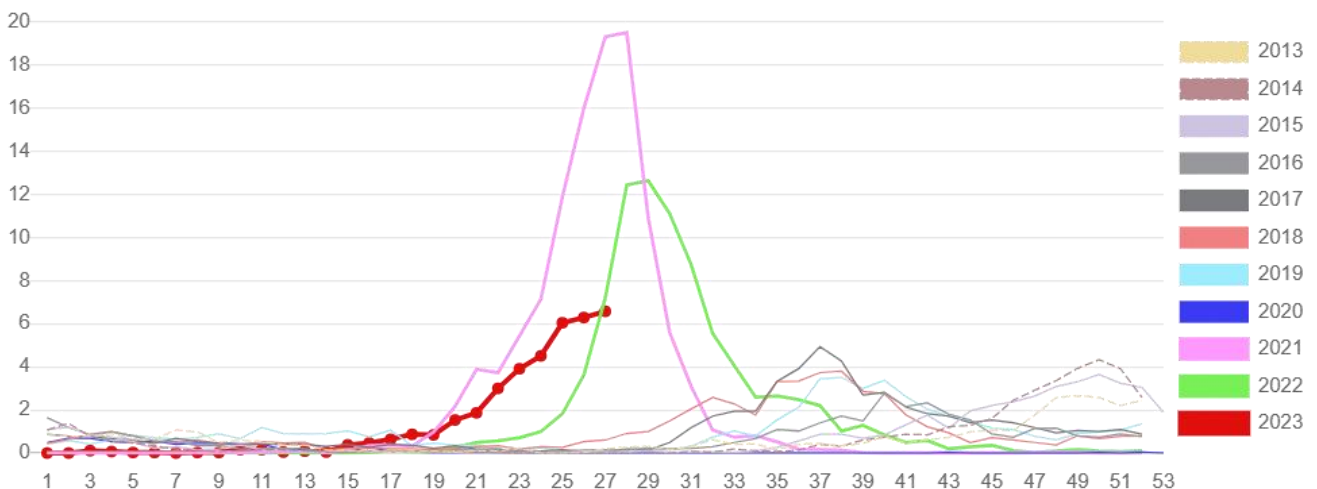
情報提供者：やましろ小児科

小児科医 山城武夫

8月のテーマ：RS ウイルス感染症

新型コロナが始まって、三年半、一般的な感染症に（5 類感染症：季節性インフルエンザ、麻疹、RS ウイルス感染症などなど）移行されて、一般生活への制限はなくなり、普通の生活に戻りつつありますが、新型コロナ感染症の感染者は増加の傾向が始まり、9 派到来がささやかれています。そんな中、RS ウイルス、夏風邪のヘルパンギーナの感染児が増加してきました。RS ウイルス感染症はもともと冬季に多い病気で、年齢を問わず感染します。軽いかぜ様症状から細気管支炎や肺炎に至るまで様々な症状を呈しますが、特に3歳以下の乳幼児では重症化することがあります。

三重県の2023年第27週 7月3日(月)～7月9日(日)の定点当たり患者数は6.58人となっています。



三重県のRSウイルス感染症定点当たり患者数 (2023年27週現在)

1) RS ウイルス感染症

RS ウイルス感染症は年齢を問わず、生涯にわたって罹患するもので、感染者（児）の咳などによる飛沫や、呼吸器からの分泌物に汚染された手や物を介して経口的に人にうつります。軽いかぜ様症状から重症な細気管支炎や肺炎などの下気道疾患に至るまで様々な症状を呈します。特に、乳幼児期において重要な疾患で、初感染の1/3が



下気道疾患を起こすことが報告され、1歳以下では中耳炎の合併がよくみられます。乳児の約70%が1歳までに罹患し、3歳までにすべての小児が抗体を獲得するといわれています。

2) 臨床症状

咳、鼻水、発熱と言ったかぜ症状が出ます。乳児では嗜眠、易刺激性、飲みの低下、喘鳴（喘息の様に呼吸時にゼロゼロ、ヒューヒューと言う呼吸音）があります。



3) 流行疫学

毎年特に都市部において流行を繰り返し、わが国においては11月～1月にかけて、12月をピークとする流行がみられます。小児の細気管支炎や肺炎などによる入院数の増加のほとんどは本疾患の活動性と一致すると考えられています。しかし、2020年RSウイルス感染症が減少し、免疫を持たない集団が多くなり、翌年2021～2022に流行が発生、ピークも6～7月になり、今後も免疫集団により、地域の小流行が繰り返されるでしょう。

4) 予防方法



主な感染経路は、大きな咳などによる飛沫感染と、その分泌物に汚染された手指や物品を介した接触で感染します（ウイルスは環境中でかなり長時間、ヒトの手で30分は生存します）。家族内感染が起こりやすく、軽症のかぜ様症状を呈する学童から家族内に持ち込まれることが多いため、乳幼児とより年長の小児のいる家族では特に注意が必要です。手洗いなど日常的に清潔を保つように心がけま

しょう。予防接種の開発が待たれますが、現在では未熟児、心疾患の乳児にこのウイルスの特異的抗体を注射して細気管支炎、肺炎などの重篤な下気道疾患の発生を抑制する方法がありますが、これは特別な場合の子供に使用します。

＊ 感染性疾患によっては、感染者が今回の様にRSウイルス感染症、ヘルパンギーナ、留まったところで流行が起こり、感染者が減ります。免疫を持たない感受者が増えると一気に広がります。季節性インフルエンザは今後流行の注意が必要です。「ワクチンで予防できる病気」をVPD（Vaccine Preventable Diseases）と呼びます。もう一度母子手帳を見てみましょう。

引用（参考）文献

三重県感染症情報センター

臨床ニュース 時流「脱コロナ」でこの夏懸念の小児感染症 森内弘幸